

3.11 ソレカラ

～障害者・
福祉職員の
「あの日」と
「ソレカラ」～



たつみ けんいち
◎立身憲一さん(男性/当時60代・視覚障害)

被災した石巻から横浜、仙台へと避難。 人との出会いで、行動の幅が広がった。



— 立身さん —



— 石巻市社会福祉協議会北上支所 —

地震 直後

自分が“お荷物”だと感じる
つらい避難所生活。
地域の外への避難を決意する。

石巻市北上町の海に近い自宅で、マッサージの仕事に地震に見舞われた立身さん。部屋では棚から物が落ちる音をして「いつもと違う大きな地震だ」と感じていました。大きな揺れから少し経った後、いつもお世話になっている社会福祉協議会の職員が車で訪れ、避難を呼びかけました。立身さんはすぐ車に同乗し、高台にある北上中学校に避難しました。この時、立身さんをはじめ同じ地域の人多くは、自宅まで津波が来るとは思っていなかったそうです。近所には高い堤防が整備されているので、少々の津波なら大丈夫という認識があったからです。しかし、立身さんが避難した後で大津波が襲来し、自宅は壊滅的な被害を受けてしまいました。

北上中学校に避難した立身さんは、そこで3日間、さらに避難を呼びかけてくれた職員がいる社会福祉協議会で2日間、お世話になりました。立身さんは避難所生活の中で、「自分の目が見えない」ことが理由で、周囲に遠慮の気持ちを強く感じたといいます。周囲の人々は立身さんの目が不自由であることを知っており、常に気を使ってくれました。しかし、周囲が配慮してくれることを意識しすぎて、自分でできることもしづらくなる、という思いを抱いたのです。また、避難者同士で搜索等の作業を行うこともありましたが、目が見えないために自分が“お荷物”になると感じてしまったこともあり、「そうやって初めて、避難所にいるのがつらいと感じました」と立身さん。自分がいては皆に迷惑をかけると思い、立身さんは避難所を出る決意をしました。

横浜で

甥を頼って避難した先で、
さまざまな出会いが。
行動の幅が一気に広がる。

震災前、一人暮らしだった立身さんは、避難所に訪ねて来てくれた甥を頼って、横浜に避難することになりました。避難先では、宮城県視覚障害者福祉協会の紹介で、横浜市視覚障害者福祉協会にお世話になりました。さらに横浜の障害者福祉施設の職員とも顔見知りになり、施設で箱折りの作業を行ったり、ボランティアと共にウォーキングをしたりと、行動の幅が広がりました。また施設所長からの紹介で、横浜の視覚障害者の卓球クラブにも足を運ぶようになったそうです。震災前は、自宅が交通の便が悪いため、家にこもりがちだったという立身さん。この時の有意義な経験が、後の大きな変化のきっかけになりました。

仙台で

仙台で一人暮らしをスタート。
援助者や地域の人
あたたかいサポートを受ける。

甥の住む横浜で4ヵ月間の避難生活を送った後、立身さんは宮城県の借り上げ民間賃貸住宅に住めることになり、仙台市に引っ越すことになりました。仙台での生活では、アイサポート仙台やヘルパー事業所の職員、日本盲導犬協会仙台訓練センターの方にお世話になりました。また、近所で歩行訓練をしていた時に、地域の人に「遠慮しないで私たちに声をかけていいんだよ」と言われたことがあり、それがとてもありがたかった、と話しています。 (2枚目に続く)